

## 転移性粘膜悪性黒色腫に対するダカルバジンおよびカルボプラチン/パクリタキセルの併用化学療法に関する研究

### 研究対象・研究期間：

2011年から2013年までの国立がん研究センター中央病院の診療録を対象とし、転移性粘膜悪性黒色腫における化学療法の治療内容を評価するための情報収集を試みます。

### 研究の概要：

悪性黒色腫は皮膚に出来る稀ながんで、日本人において年間発生率は10万人に2、3人程度とされています。その中で粘膜悪性黒色腫は日本人においては8%程度と報告されています。このように非常に稀ながんですが、進行した場合の予後は不良で5年生存率は25%程度と報告されています。早期であれば手術や放射線療法で治る場合もありますが、一旦他の臓器(肺や肝臓など)に転移した場合は治すのは困難です。転移した粘膜悪性黒色腫には化学療法を行います、その有効性は限定的です。

当科は日本国内においても粘膜悪性黒色腫の患者さんが集まる有数の施設です。我々の調べ得た限り2005年から2014年に約1100人の悪性黒色腫の患者さんが受診されました。その中で粘膜悪性黒色腫の患者さんは約150人程度(14%程度)を占めていました。

転移を起こした粘膜悪性黒色腫に対して行う化学療法は転移を起こした皮膚悪性黒色腫に対して行う化学療法に準じて行うのが一般的です。ダカルバジンという薬が1970年代から用いられてきましたが、その奏効率は13%程度、平均生存期間は5.6から11か月程度と報告されています。その治療成績は不良のため当科においては2011年からカルボプラチン、パクリタキセルの併用化学療法を主にダカルバジンを投与し効果が見られなかった患者さんに開始しました。

本研究では2011年から2013年までにダカルバジンに引き続いてカルボプラチン、パクリタキセルの併用化学療法を行った患者さんに対する治療効果を比較します。

### 研究の意義・目的：

転移性粘膜悪性黒色腫に対するダカルバジンに引き続きカルボプラチンおよびパクリタキセルの併用化学療法を行うことの有効性を検討することを目的とします。転移性悪性黒色腫に対し、従来行われてきたダカルバジンによる治療よりも生存期間を改善することが証明されている、BRAF 阻害薬や、PD-1 抗体が新

たに登場し、転移性悪性黒色腫に対する治療は大きな変革期を迎えつつあります。しかし、BRAF 阻害薬や PD-1 抗体であっても転移性粘膜悪性黒色腫を治癒に結び付けるのは困難です。この研究では転移性粘膜悪性黒色腫に対して、ダカルバジンに続きカルボプラチンおよびパクリタキセルの併用化学療法の治療効果と副作用について改めて検討します。

個人情報保護に関する配慮：

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が特定されないやり方で情報を収集します。個人情報が院外に出ることはありません。患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申して出てください。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1

国立がん研究センター中央病院 皮膚腫瘍科 小俣 渡

FAX 03-3545-3567/ TEL 03-3542-2511